

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



### 合田 直弘

5月30日に北米メリーランド州のローリー・パーク競馬場で行われた開催の、第2競走に組まれた牝馬限定の条件戦(芝8.5F)を、管理馬クイーンオブコーズ(牝3、父クリエーティヴコード)で制したアンソニー・リンチ調教師が、今月このコラムの主役である。

それは、さまざま「初」が重なった勝利だった。そもそも5月30日のローリー・パーク開催は、新型ウイルス感染拡大の影響で3月15日を最後にストップしていた競馬が、2か月半ぶりに再開した日であり、第1競走はダート戦だから第2競走は再開後初の芝のレースだった。そして、今年1月に開業したリンチ調教師にとって、この勝利は通算8戦目にして初めて手にした1着だったのである。

そしてアンソニー・リンチは、なんと弱冠18歳という若き調教師なのであった。JRAでは1965年に28歳で免許を取得した成宮光明調教師が最年少だが、海外に目を向ければさるに若年の調教師を見かけることが珍しくない。近年では、愛国を拠点に騎手をやっていたエイダン・オブライエン調教師の二人の子息が相次いで調教師に転身したが、兄のジョゼフは22歳、弟のドナカは21歳にしての厩舎開業だった。大御所では、20世紀後半から21世紀の初頭にかけて活躍した英國障害界の伯樂トビー・ボールディン

が開業したのが20歳の時だった。調教師だった父が54歳で急逝。厩舎をバックアップしていた大手馬主から「後はお前が継げ」と命じられ、否応なく調教師業を営むことになったものだ。

北米には、もっと若い記録がある。98年に競馬殿堂入りを果たし、開業以来の通算勝ち星がまもなく5千に到達しようとしているビル・モットが、調教師としての初勝利を挙げたのは、彼がハイスクールに在学していた15歳の時だった。預けてくれる馬主がいて、使える調教施設があれば調教師を名乗ることが比較的容易な制度だからこそ、十代の調教師が成立しうるのだ。アンソニー・リンチも、そういう環境に育つた若者だったのである。

父は北アイルランド出身で、メリーランドを拠点に20年以上にわたって開業しているカル・リンチ調教師だ。13年にジャヴィアでG3ゼネラルジョージS(d7F)、17年にエルアリーブでG3ジエロームS(d8F70Y)やG3ウイザーズS(d8.5F)に優勝。そのエルアリーブで17年のG1ケンタッキーダービー(d10F)出走も果たしている。

兄のチャーリーとともに父の厩舎を手伝う日々を送っていたアンソニーだが、もともと独立志向が強く、兄よりも早く自らの看板を掲げた厩舎の開業を決意。3頭の管理馬を手許におき、今年1月に

厩舎を立ち上げた。

クイーンオブコーズは、もともと父の厩舎にいた馬で、昨年12月27日にローリー・メイドン(d8F)を4馬身差で制し、デビュー3戦目で初勝利を挙げていた。アンソニーの開業にともない、父の厩舎から子の厩舎への転厩を打診したところ、馬主のフランク・ダヴィーノ氏がこれを快く了承したのである。

移籍初戦となつたのが1月31日にローリーで行われた条件戦(d8F)で、逃げるという積極策に出たクイーンオブコーズは直線でもよく粘つたものの、ゴール間際にウイックトティーという馬に頭差交わされ、アンソニーはわずかの差で初勝利を逃すことになった。続いて出走した2月27日にローリーで行われた条件戦(d8F)でも同馬はハナを主張したのだが、ここでは絡んでくる馬がいてすんなり先行出来ず、7着に敗れることになった。

その後クイーンオブコーズが5月30日のレースでは一転、後方待機から直線で鮮やかな末脚を見せ、2着以下に1.1/4馬身差をつける差し切り勝ちを演じたのである。この勝利を誰よりも喜んだのが父のカルで、時節柄派手なお祝いは出来ないものの、家族で静かに祝杯をあげたいと語った。

18歳の若きホースマンの前途が明るいことを祈りたい。